注解『七十一番職人歌合』稿（二十七）

下房俊一

凡例

一、本稿には、『七十一番職人歌合』の中、第五十七番および第五十八番の注解を収めた。

五十七番　庖丁師　調菜

〔職人尽〕

〔誹諧職人尽〕庖丁師　宇治丸といふは人なりうなぎ鮓＜長治＞　柚の花やむかしを忍ぶ料理の間＜はせを＞　名月やころからこそ料理人＜和葉＞　庖丁のはたらき見たりはつかつほ＜千里＞　百日の手際見せばや洗ひ鯉＜硯寿＞　初鮭や俎いたけづる波の音＜超風＞　忠政も心得てし歟つるしぎり＜寥和＞　／　てうさい　都にて珍しく海松のさしみかな＜長治＞　喰ひものの花咲きにけり夕すずみ＜乙由＞　提重の中をうらなえ梅の花＜超波＞　油揚の音も日永し唐料理＜寥和＞　〔職人尽発句合〕三十五番左　包丁人　生箸にさしこむ月や包み鯉　包み鯉は生間流の手段にて、さしも手際の清らなる、月さへさしそふ風情、見事なり。百日の鯉切りし何がしの者は、いづれの流儀にや。「鶴の包丁まねて見せ申さ

ん」〔**職人尽狂歌合**〕右　庖丁人　うしほなら鯛といふ場を照る月やこれ雪花の三つ道具なり　……右、雪月花の三といはれしのみ。左、なべてならざれば勝ちて侍るべし。　／　左　庖丁人　照る月をもてなし顔の料理人その献立は見る目ねぬなは　左、かずかずのまうけせる結句の庖丁と聞こゆ。……左の庖丁、月影の指神子（さすのみこ）（右歌）には及ばざるべくや。　／　右　庖丁人　庖丁もお留守となりて秋今宵月のさしみの更科の里　……右、更科の里、にはかなるやうにや。左可為勝。

【本文】

五十七番

おほ鯉のかしらを三にきりかねて
かたわれしたるあり明の月
夜もすからあすのてんしんいそくとて
こゝろもいらぬ月をみるかな

左右ともに、吹毛の難も侍れは、哥からさせる事なきによりて、為持。

こいゆへにはうちやうかたなはをみれは
ほろ〳〵とこそねもなかれけれ
いかにせむこしきにむせるまんちうの
おもひふくれて人の恋しき

左歌、庖丁には、魚も鳥もいくらもよせありぬへきを、二首なから鯉をよめる、才学なきに似たり。せめて、こしきのまむちうのふくるらむは、才学すこし侍り。可勝。

おほ鯉―〔類〕大鯉
かたわれ―〔類〕片われ　あり明―〔類〕在明
夜もすから―〔類〕よもすから
こゝろ―〔類〕心　かな―〔明〕〔類〕哉

こい―〔忠〕〔明〕〔類〕こひ　ゆへに―〔類〕故に　はうちやうかたな―〔類〕包丁刀
まんちう―〔類〕饅頭
おもひふくれて―〔類〕思ひふくれて
左歌―〔類〕左哥
ありぬへきを―〔類〕有ぬへきを　才学―〔忠〕〔明〕〔類〕才覚
なきに似たり―〔類〕なきにゝたり　こしきのまむちう―〔類〕甑の饅頭
ふくるらむ―〔類〕ふくるらん　才学―〔忠〕〔明〕〔類〕才覚　すこし―〔類〕少し

◇　　◇

はうちやうし
おたてか
かたみおろし、
いか、せむ。

てうさい
さたうまん
ちう、さいまむちう、
いつれもよく
むして候。

はうちやうし―〔白〕庖丁〔忠〕五十七番庖丁（はうちやう）し
おたてか……いか、せむ―〔白〕〔忠〕〔明〕〔類〕ナシ
かたみおろし―〔尊〕かたみおろしか

さたうまんちう―〔白〕〔忠〕砂糖まんちう
さいまむちう―〔白〕〔忠〕〔明〕〔類〕さいまんちう
いつれも―〔白〕〔忠〕何も

〔語注〕

庖丁師は、庖丁を使って、魚や鳥を料理する者。

なお、「庖丁師」の「師」の字が正しいかどうかについては、未考。天理本『狂言六義』抜書の「鱸包丁」に、「包丁師」、「包丁人」の両語が見え、これによれば、「庖（包）丁師」を、連濁で「はうちやうじ」と読み、さらにそれが訛って「はうちやうじん」となったかと想像されるが、確証はない。この他に「庖（包）丁師」という表記は管見に入らない。

調菜は、菜を調える意で、副食物を調理すること。また、その調理、調理人。特に精進物に関していう。後世の例であるが、『かたこと』一に、「精進物の調菜を嘗侍る挨拶に、料理が出来て侍るぞ、などとはいふまじき事とぞ。調菜の出来て侍る、とはいふべしと云り。料理とは魚鳥の上にてのみ云言葉なり」とある。本歌合にいう調菜は、もと寺院な

どに属した調菜が独立して、一般向けに調理・販売するようになったものであろう。調菜に似た職人として、第十八番左に、饅頭売があった。

◎**おほ鯉**　単に大きな鯉という意味ではなく、一定の作法に基づく庖丁の対象としての「大鯉」を指すものと思われる。古く『今昔物語集』二十八に、「俎ノ上ニ（鯛ノ）荒巻ヲ置テ、事シモ大鯉ナドヲ作ラム様ニ、左右ノ袖ヲ引疏テ、片膝ヲ立テ今片膝ヲバ臥テ、極テ月々シク居為シテ」（左京属紀茂経、鯛荒巻進大夫語第三十）と見える「大鯉」も、そのような意味での大鯉であろう。（ただし、この「大鯉」は「オホキナル鯉」と読む説もある。）また、後世の資料であるが、近世初期の四条家薗部流の料理秘伝書『料理切形秘伝抄』は、「大鯉切」の切り方を、「小鯉切」などと並んで図解している。

◎**かしらを三にきりかねて**　「頭を三つに切る」は未詳。『新大系』は、「三枚におろす」とする。いずれにせよ、大鯉を作法どおり切る技術のないことをいうのであろう。

◎**かたわれしたるあり明の月**　「片割れ月」（半月）は歌にまま用いられる言葉であるが、「片割れす」という語形は管見に入らない。おそらく俗語で、半分に割れることをいうのであろう。切り損ねた大鯉の頭のように、半分に割れた有明の月。なお、歌合の月の歌に、有明の月を詠むのは、大いに非難されるべきことである。

◎**あすのてんしんいそくとて**　「点心（てんじん）」（「てんしん」とも）は、茶請（うけ）の菓子。虎明本狂言「まんぢう」に、「まんぢう共申、てんぢんとも申て、うへつかたのおしうも参るものでござる」とあって、特に饅頭を指すことがあったようである。勿論、俗語。明日の点心を急いで作る、というのである。

◎**こゝろもいらぬ月をみるかな**　気もそぞろで月を見る、というのであるが、歌合の月の歌としては、まったくふさわしからぬ内容である。

◎**左右ともに、吹毛の難も侍れは**　「吹毛の難」は、些細な欠点の意で、「毛を吹く疵」などとともに、歌合判詞にまま用いられる言葉。（二十番語注「あなかちに毛を吹てきすをもとむへからす」参照。ただし、同項末尾「本職人歌合五十七番月の歌の判詞に、……」は、失考であったので、削除する。）ただし、ここは、左歌の「片割れしたる有明の月」、

および、右歌の「心も入らぬ月を見るかな」について言うと思われるが、いずれも、歌合の月の歌としては、致命的な誤りを冒した表現である。従って、判詞は、本来ならそのことを指摘しなければならないところであるが、あえて「吹毛の難」としたのは、強烈な皮肉と見るべきであろう。

◎**哥から**　歌全体の品格のことをいうが、歌合判詞では、「歌がらはきよげなり」(天徳四年内裏歌合、九番判詞)、「歌がらはなだらかなり」(元永元年十月二日内大臣家歌合、時雨三番判詞)などのように、主として声調に関して用いられる(和歌文学辞典「歌がら」の項)。

◎**こいゆへに**　「恋」に「鯉」を掛ける。

◎**はうちやうかたなはをみれは**　「庖丁刀」は、魚・鳥などをさばく刀。『貞丈雑記』六・飲食之部に、「魚鳥野菜等を切る刀を庖丁とばかり云はあやまりなり。古は、魚鳥を切る刀をば庖丁刀と云、野菜を切る刀をば菜刀と云し也」とある。全体として、序詞的に、下句の「ほろほろと」に続く。

◎**ほろ〳〵とこそねもなかれけれ**　「ほろほろと」は、ここは、庖丁の刃が欠け落ちるさま。「ぼろぼろと」と、濁音で読むべきかもしれない。その意に、涙がこぼれ落ちるさまをいう「ほろほろと」を掛ける。

◎**こしきにむせるまんちうの**　「甑」、「蒸す」、「饅頭」は、勿論俗語。全体として、序詞的に下句に続く。

◎**おもひふくれて**　饅頭が脹れるように、私も思い脹れて。「思ひ脹る」は、(相手のことを)思うばかりで口に出せず、腹が脹れる、つまり、不快の念がたまる意であろう。『十二類絵巻』下の狸の歌に、「うきことを思ひ脹れし悔しさよ我が腹鼓うちぞ驚く」の例があるが、通常歌に用いる言葉ではなく、散文の例も管見に入らない。「饅頭」の縁で、あえて奇妙な表現をしたのであろう。

◎**庖丁には、魚も鳥もいくらもよせありぬへきを**　「寄せ」は、歌論用語で、ある事柄に関連する言葉。縁語など。「庖丁」には魚にしても鳥にしても、いくらでも寄せがあるはずだのに。

◎**才学**　忠寄本・明暦板本・類従本は「才覚」。歌を詠む上での機知・工夫(四番語注「我道のさいかく、まことにきこえたり」、および四十四番語注「才学」の項参照)。

言葉を用いた点が、まだしも優れている、というのである。左歌に較べて右歌は、甑の饅頭の縁で「脹る」という

◎**せめて、こしきのまむちうのふくるらむは、才学すこし侍り**

◎**はうちやうし**　白石本は「庖丁」とのみあるが、誤脱であろう。

◎**おたてかかたみおろし、いかゝせむ**　白石本、忠寄本、明暦板本、類従本は、この言葉を欠く。尊経閣本は、「かたみおろしか」と「か」を入れる。その方が意味が通じやすそうだが、後述のごとく、「尾立て」と「片身下ろし」とが相対立する作法であるかどうかは疑問。「尾立て」は切った魚の尾を俎の上に立てる作法。「片身下ろし」は、「両身下ろし」の対で、魚の片身だけを下ろす作法か。『料理切形秘伝抄』に、「片身下之尾立鯉之事」および「両身下尾立鯉之事」、また、「片身下魚体之鯉事」、「片身下之鯉事」などの図解がある。なお、これによれば、「尾立て」と「片身下ろし」とは、必ずしも相対立する作法とは思えない。なお、『和国諸職絵尽』の画中詞は、「ことぶきのほうてうは家〳〵の大事あり」。

◎**さたうまんちう**　砂糖饅頭。砂糖入りの餡の饅頭。現在普通にいう饅頭の類。塩饅頭や菜饅頭（次項）に対していう。

◎**さいまむちう**　菜饅頭。中に野菜を入れた饅頭。

〔絵〕

庖丁師は、烏帽子、直垂、袴姿で、右手に庖丁、左手に真魚箸（まなばし）を持ち、俎板の上の魚（鯉か）を料理するところ。右に、皿鉢と水瓶。

調菜は、剃髪して僧衣を着る。左に蒸籠に入れた饅頭。前に、匙、蓋つきの浅鍋状の器、それにいま一つの器。後者の器について、『ヴィジュアル史料日本職人史[I]』は、「コシキから湯気が出ている様子」とする（「調菜（一）」の項）。僧形をしているのは、もと寺院に属していたことの名残か。

〔参考〕

○亭主出て、存じ之外永居仕つた、新座の者を置いて来た、急ぎ罷り帰らふト云テ戻る。経を読む音がするト云テ、見つけて、これはいかな事、出家が魚を切つて、料理者が経を読む、是は奇特な事かなト云テ、やい〳〵、是は何事ぞト云時、二人共にうろたへて、坊主、鯛を取つて経に読む。宗八は経をつかまへて包丁する。憎い奴がト云テ叱る。二人共に逃ぐる。追入り也。

（天理本狂言「宗八」）

○抑打身といふ事は、寛和元年乙の酉、其の比は花山の院の御代なりしに、四季おりおりの御遊び、事に超へ、御狩に好かせ給ふにより、政頼に鷹を据へさせ、国々へ御下向ある。おりふし、遠江の国橋本の長が宿所に着き給ふ。長は出であひ申し、三献のかはらけ据へたりし時、板に鯉を出だす。その時の庖丁人は史官の太夫ただまさなり。ただまさはさんらう近き釣殿に出でて畏まる。それただまさと有りしかば、ただまさ何とか思ひけん、板なる鯉をば切らずして、簀の子の板を一間はづし、下なる魚を挟んで上げ、鶚の鰭をはらりと下ろし、魚を放せば、魚は放されたるを喜び、石菖の陰に遊び隠れぬる。さて其の後に板引き寄せて、すつはと切つてしつとと打ちつけ、打ちつけ、並み居給へる上北面・下北面・納言・宰相・検非遣使・黒袴の徒党までも、三刀づつ打ちつけ参らせしかば、ただまさが只今の庖丁神妙なり、勲功は請うによるべしと御感有りしより此のかた、打身といふ事始まりたり。されば打身には、海の物にては鯛、川の物にては鯉ならでは有るべからず。

（虎明本狂言「すゞきばうちやう」）

○〳〵……たとへば只今の鱸を洗ひすまひて、切目尋常なる俎に、青木のまな箸、備前庖丁、紙一重ねおつ取り添へ、しつけ知つたる若ひ者が、二人して舁ひて出う所で、そなたへお切りそひと申さうずれども、そなたのおしやらふは、いやいやこれの庖丁、近ふ見参らせぬ、一手遊ばひて御見せ候へと、おしやらひでかなふまひ。〳〵中々さやうに申さう。〳〵所で、某よしにあまり、箸刀おつ取つてて（ママ）、紙をば三つに切り、二つを下に押し下ろし、一つを俎がしらにとうど置き、例式の水こそげ、さつさつと三刀するままに、一の刀にて魚頭を継ぎ、二の刀にて上身を下ろし、下ろしもあへず魚頭を、俎がしらにとうど置き、おつ取り返し下身を下ろし、中打ちやうちやうと三つに切つて、いざこれを熬り物にしておまらせう。〳〵一段ようござらふ。〳〵其の間ただは何とてもなあらふずるぞ。幸ひ有る、上身下身を掻き和へにしておまらせう。〳〵なをなをようござらふ。〳〵総じてようお心やれ。魚の身の、厚ひ所は薄ふ見へひ、薄ひ所は

厚ふ見ゑひと、作るが庖丁人の腕でおりやるげな。〈〈中々。〈〈それはいかにもひつつくばふて、刀早に、はあ、すつはりすつはりと作りすまひて、なり天竺の掻敷に、深草がわらけに、ちよぼちよぼとよそふて、おまらせうが、よふはあるまひか。……（同）

○日本庖丁のハジメハ、四条家ノ庶流山陰中納言也。荘子養生主ノ篇ニ、庖丁牛ヲ解事ヲツマビラカニ書リ。丁氏ヨク庖厨ノ事ヲシリテ、宰烹スルユヱニ庖丁ト云也。是ヨリ脔刀ヲモ云也。此類多シ。（同）

○これらの居間は、客人を接待する部屋に続いていて、渡り廊や廊下を通ってそこに達する。この場所には家人のための内輪の台所と、煙出しの形をした清潔な場所〔かまど〕がある。そしてその煙出しのある所では、目の前で貴重ないくつかの食物を煮炊きするのが見られる。たとえば鶴、野鴨、白鳥、その他狩猟の貴重な獲物、そして主人の鷹で捕えたもののほかに友人の鷹でとって贈られてきたものがあり、これは彼らの間では甚だ尊重される。その他に、鮭など珍重される魚がいろいろあって、すべて調理人がその前で切盛りする。切盛りすることは日本人の技芸の一つなので、それのきわめて器用な人々がいて、切盛りする時には、なにものにも手を触れないで、料理に作る前にすべて生のままで切盛りする。これは実際に見なければ理解できないことである。そのためにそれぞれの用途に適した道具がいろいろあって、極端にまで清潔にしてある。たとえば、庖丁、貴重な鉄を使ったきわめて鋭利な肉切庖丁、鉄製か、先端に鉄のついている木製かの日本式の肉刺があり、台の上で切盛りされたものとか、前もって切盛りして用意し、一種の厚い台の上に載せてあるものとかを、その肉刺で手にとる。これは御殿において領主の前でなされる仕事なので、そこに示される器用さと清潔さ、規則に従ってやるところは、何ともいうべき言葉がないほどりっぱである。これらの領主は、その料理人とその中ですぐれた料理頭に、主人や客人のためになされること一切を命令する公家貴族出身の者を召しかかえる。彼はとりわけ食物を清潔に扱い、食物を彼ら風に味つけすることと、煮炊きをし、また客人に差し出す食器類、たとえば鍋、皿、椀、給仕用の縁高盆、その他の彼ら流に食卓で使うものに注意を払う。（日本教会史、一巻、十二章）

○これらの台所には、手洗い場やその他すべてのものが備わっていて、料理するのによく清潔さが保たれる。従って、

料理するためにその物を洗う時以外はそれに手を触れない。なぜなら魚や狩した鳥獣の肉を切盛りする役目の者がいるからである。すなわち、味つけをし煮炊きする前に、厚くてとてもきれいな台〔俎板〕の上で、生のまますべてを切盛りするのに、彼らはどんな物にも手を触れないで、鉄の肉刺（ガルフォ）、庖丁、肉切庖丁を使うのである。また、先に言及したように、品物が貴重で、鷹狩で手に入れたものであれば、往々にして領主や客人の面前で切盛りすることがある。それはきわめて器用な人々の仕業なので、その仕方を見ていると驚嘆させられる。（同）

○第二の言葉である能（シオ）nōは学芸を意味し、またはそのことに器用であり、技能があることを意味する。このものは貴族（パトリー）の慣習からも、また武家（ミリタール）の慣習からも、高官（グランデ）、武家貴族（ジェンテ・ノーブル）および公家貴族（フィダルゴ）によってそれ自体名誉とされ、重んじられ、行なわれている。彼らはこれを十種数え上げている。……第三は〔庖丁で〕食物を切り分けることで、彼らの間では上品で常用の仕事である。（同、二巻、一章）

五十八番　白布売　直垂売

〔職人尽〕

〔吾吟我集〕寄布恋　布ならぬ我が名を白く言ひさらすあくたれ者の口のさがなさ　〔人倫訓蒙図彙〕布曝　曝しの始めは宇治槙嶋（まきのしま）なり。京にては、五条川原にあり。今は奈良をもつて第一とす。曝しの地壱疋（ぢ）に四尺の余慶あり。これを取りても曝し、又、代壱疋に壱匁八分曝し賃とかや。〔誹諧職人尽〕白布売　布しまを織らばやをらん霜降り地〈宗伴〉波の音白くや布の嶋さらし〈女　山人〉　布嶋の白波を月の晒し物〈重次〉　衣替へ白きは物に手のつかず〈路通〉　布売やみな香久山の干し余り〈田社〉　白布の雪は降りけり富士詣で〈文尺〉　ぬの売のいただく雪や越後布〈寥和〉　／

ひたゝれ売　直垂を脱がずに結ぶ清水哉＜一髪＞　立ち出でてひたゝれ売らん花の春＜群牛＞　曽我殿は町直垂の袖寒し＜雪麿＞　寺紅葉ひたゝれほしき夕部かな＜寥和＞　**〔職人尽狂歌合〕**右　〔寄〕直垂師恋　逢ふ夜半の嬉しさにけふ涎さへひたたれしとて君な笑ひそ　……右、ひたたれしを物の名に詠みて、恋の心を述べられし、よろし。本末にいま少々職の上を言はまほしくや。されど、姿ととのひてそゆ(見カ)れば、持とすべくや。　／　右　寄直垂師恋　起き出でて袖は泪にひたたれし衣紋つくろふきぬぎぬぞうき　……右、別るる恋、よろしく言ひおほせられつれど、猶、左勝りぬべし。

【本文】

五十八番

ひとすちの霜かとそみるしつのめか
おるあさぬの、月の夜さらし
雲まきの町ひたゝれのすきかけの
さしてさはらぬ月のそてかさ

左右ともに、さる事ときこゆ。よき持にて侍へし。

されはとて人もすさめぬ布おりの
わか手つくりのこひもする哉
しのひあまる涙をいかにつゝまゝし
まちひたゝれのせはくみしかや

左、我手つくりの恋、よく布におもひあはせたり。右は、哥もはたはりせはくきこゆ。以左為勝。

ひとすち―〔類〕一筋　しつのめ―〔類〕賤のめ
おる―〔忠〕〔明〕〔類〕をる　あさぬの―〔類〕麻ぬの
そてかさ―〔類〕袖笠
ともに―〔類〕共に

布おり―〔忠〕〔明〕布をり〔類〕布織
わか―〔類〕我　こひ―〔類〕恋
しのひあまる―〔類〕忍ひあまる
まちひたゝれ―〔類〕まち直垂　みしかや―〔類〕短や
せはく―〔白〕せ
為勝―〔忠〕勝とす

◇

白ぬのうり
しろぬの
めせなう。
はたはりも
しやくも
よく候は。

ひたゝれうり

◇

白ぬのうり—〔白〕白布うり〔忠〕五十八番白布うり〔類〕白布売
めせなう—〔白〕めせなふ〔忠〕めせのふ
しやく—〔白〕〔忠〕尺
よく候は—〔白〕〔忠〕〔類〕よく候そ
ひたゝれうり—〔白〕〔忠〕〔類〕直垂うり

〔語注〕

白布は、白い晒の布。職人名は「白布売」とあるが、歌には「夜晒」、「布織」などが詠み込まれている。生産と販売が未分化であった実態を反映しているのであろう。

直垂は、男子が上半身に着ける服の一つ。もと庶民の労働着であったが、鎌倉時代には武家が幕府に出仕する際の公服となり、室町時代には公家も私服として用いるようになった。

◎**ひとすちの霜かとそみる**　下句の「麻布の月の夜晒し」を「霜」に見立てたのであるが、「一筋の霜」という表現は、勿論、異例。

◎**しつのめかおるあさぬの**　賤の女が織る麻布。

◎**月の夜さらし**　「夜晒」は、『角川古語大辞典』に、「夜、屋外で外気に当るままにしておくこと。布をさらすことにいう」として、『菅家金玉集』三の、「滝川にて月などに布さらせる事常の事也。俗に夜さらしといへり」を引く。夜、布を晒すことが実際にあったのかどうかについては未考だが、歌には、「山人の衣なるらししろたへの月にさらせる布

引きの滝〈良経〉」（続古今集十八、雑歌中）など、滝・雪・卯の花などを夜晒す布と見立てるものがままある。ただし、逆にここのように布を他の物（霜）に見立てるのは異例。また、『菅家金玉集』三に、先の引用部に続けて、「但、夜さらしはいまだ文にも聞きなれず」というとおり、「夜晒」の語自体は用例を見ない。

◎雲まき　未考。『中世職人語彙の研究』は、「『まき』は巻染のことであろう。『まきぞめ』（巻染）は、『絞染の一。絹または布を巻いた上から細い緒で固く巻いて染色し、緒を解けば巻いた部分が白く残るようにした染め方。まき』（広辞苑）である。……『雲まき』とは、巻きぞめが染めあげられたとき白雲がところどころにかかっているように見えるところからいわれたのであろう」（「くもまき」の項）とし、『ヴィジュアル史料日本職人史[I]』は、「巻いた反物のことで、巻き絞りのことではないだろう」（「直垂売（一）」の項）とする。「雲」は「月」の縁語。

◎町ひたゝれ　「町」は「待ち」の当て字で、誂え物に対して、出来合いの直垂をいうのであろう（二十番語注「町かふと」の項参照）。後世の『誹諧職人尽』ひたゝれ売に、「曽我殿は町直垂の袖寒し〈雪麿〉」とある。

◎すきかけ　透き影。物の隙間や薄い物を通して差し込む光。出来合いの粗悪な直垂で、生地が薄くて、月光が射し込む、というのであろう。上句全体で序詞的に下句に掛かる。

◎さしてさはらぬ　「透き影の射して」から「さして障らぬ」と続ける。直垂を通してもさほど光度が落ちないように、あまり邪魔にならない程度の（月の袖笠）。

◎月のそてかさ　「月の暈」というべきところを、直垂の縁で「月の袖笠」と言った。「袖笠」は、袖をかざして笠の代わりにすること。「月の袖笠」は、「空はまた雨気になれや春の夜の月も霞の袖笠を着て〈実兼〉」（続千載集七、雑体）の例がある。なお、雨気の月は、歌合の月の歌に詠むべきではないとされる（六番語注「あま気のつきのしぼりいでつゝ」の項参照）。

◎されはとて人もすさめぬ　「すさむ」は、関心を寄せてもてはやすこと。「山高み人もすさめぬ桜花いたくなわびそ我見はやさむ〈よみ人しらず〉」（古今集一、春歌上）、「これを見よ人もすさめぬ恋すとて音をなく虫のなれる姿を〈源重光〉」（後撰集十一、恋三）など、「人もすさめぬ～」の形で用いられることが多い。ここは、語法的には、すぐ下の「布

織」に係ると見るのが自然であるが、歌の意味からすれば、同時に下句の「恋」にも係ると見るべきであろう。その場合、「さればとて」は、自分が恋しているからといって、の意。「人」は、恋の相手。

◎**手つくりのこひ**　「手作り」は「手作りの布」のこと。簡単な道具を用いて手で織った布。主として苧（からむし）などの繊維で織って、水でさらして白くしたもの。布の中では高級品で、絹などと同じく通貨の機能を果した（角川古語大辞典「てづくりのぬの〔手作布〕」の項）。その「手作り」に、自分の勝手な考えで事を行う意を掛け、「手作りの恋」と続ける。「手作りの恋」は、具体的には、全く相手にされぬ「自作自演の恋」というほどの意であろう。「手作りの布」の意の「手作り」は、「玉河にさらす手作りさらさらに昔の人の恋ひしきやなぞ〈よみ人しらず〉」（拾遺集十四、恋四）など、歌にまま見えるが、「手作りの恋」は、勿論、異例の造語。

◎**しのひあまる**　忍び余る。恋の思いを他人に隠そうとしても隠しきれない。なお、「忍ぶ」を耐え忍ぶ意と取って、こらえかねる、と解する（例えば、日本古典文学大系『新古今和歌集』の後掲歌に対する頭注や、同『源氏物語 四』、夕霧巻の「……などやすらひて、忍びあまりぬる筋もほのめかし聞え給ふに、……」に対する頭注等々）こともできようが、「忍び余り落つる涙をせきかへし押さふる袖よ憂き名もらすな〈よみ人しらず〉」（新古今集十二、恋歌二）、「忍び余り人に知れつつなくきぎすその妻恋ひのほどよいかにぞ〈隆信〉」（六百番歌合、春中）などの「忍び余る」は、前者の意に重点があるように思われる。ここも、下に「涙をいかに包ままし」とあるから、同様に解するのがよかろう。

◎**涙をいかにつゝまゝし**　「涙を包む」は、涙を衣の袖や袂に包むようにして隠すこと。「つつめども袖にたまらぬ白玉は人を見ぬめの涙なりけり〈安倍清行〉」（古今集十二、恋歌二）のように、涙を包もうとしても包み切れない、という否定的な用法で、恋の歌に常套的に用いられる。ここも、こらえきれない涙をどうして包みおおすことができようか、というのである。

◎**まちひたゝれのせはくみしかや**　待ち直垂で（袖や袂が）狭く短い、というのである。そのわけについては、待ち直垂は一般に費用を切り詰めているから、と解することもできるが、出来合であるため買い手の寸法に合わない、と解した方がおもしろい。なお、一首全体として見るに、涙を包み切れないことの理由を、上句は「忍び余る」で表現し、下

句は「待ち直垂の狭く短」いことに求めている。理屈から言えば、両者の理由が相半ばしているかのごとく思われるが、実際に一首を読み下したとき受ける印象はそうではない。上句は、前項で述べたとおり、伝統的な恋歌に普通に見られる表現であり、その意味でまったく違和感はないが、下句はきわめて異様である。その相反する両者がこの順序で並んでいることで、いわゆるドンデン返しの効果が生まれる。あたかも、本当の理由は前者ではなく後者なのだ、とさえ言っているような印象を、読者は受けることであろう。爆笑を誘う一首である。

◎よく布におもひあはせたり　「手作りの布」から連想して、「手作りの恋」という言葉を思いついたことをいう。「思ひ合はす」は、歌合判詞に、「神楽のおこりに今夜の星をおもひあはせられたる、ゆゑなきにあらず」（千五百番歌合、九百九十四番判詞）などの例があるが、ここは、「布」の縁で「合はす」という語を用いたか。

◎哥もはたはりせはくきこゆ　「せはく」は、白石本は「せ」とのみあるが、誤脱であろう。「端張」は布や着物などの幅。転じて、物の勢い。ここは、歌に「待ち直垂の狭く短や」と言ったのに対し、歌自体も勢いがない、と茶化したのである。勿論、「端張」は、「……なにに残さん草の原といへる、はたばり殊に聞ゆる心、いますこしは勝ると申すべくや」（後京極殿御自歌合、四十五番判詞）のような例がないではないが、通常判詞に用いる言葉ではない。

◎はたはりもしやくもよく候は　「よく候は」は、白石本・忠寄本・類従本は「よく候そ」。どちらにしても、意味に大差はない。「端張」は、ここは、布の幅。「尺」は長さ。やや時代が下るが、『南方録』墨引に、「惣而、ヨキ盆ト云ハ、台子上段ニカザリテ、道具クバリ、カネ合ヨキヲ云也。御物ノ六枚の御盆モ、外ニモ結構ノ盆イカホドモアリケル中ニテ、御道具相応、一盆々々クバリテ、尺（盆の直径）ノヨキヲ以テ極メラレタル也」と、「尺良し」の例が見える。ここは、布の幅も長さも十分にある、の意であろう。

〔絵〕

白布売は、頭巾様のものを被り小袖を着、白布を広げているところ。前に、物差しと白布の入った箱。

直垂売は、烏帽子、直垂、袴姿。横に、直垂用の反物の入った箱。前に、その箱の蓋の上に並べた反物。歌の「待ち

直垂」とは異なって、注文を受けて直垂を作る、という設定であろう。

〔参考〕

○　われて流るる水の麻の葉
　布さらす賤が小船や朽ちぬらん　〈宗砌〉　（初瀬千句、五）

○　汲みあぐるさざれ石井の手にたゆく
　さらせば布のかはく間もなし　〈日晟〉　（同、九）

○　山白妙に匂ふ卯の花
　布さらす宇治の川波夏かけて　〈宗砌〉　（文安月千句、十）

○　かす糸や天の河瀬に染めぬ覧
　いり日に布をさらす滝なみ　〈宗祇〉　（美濃千句、九）